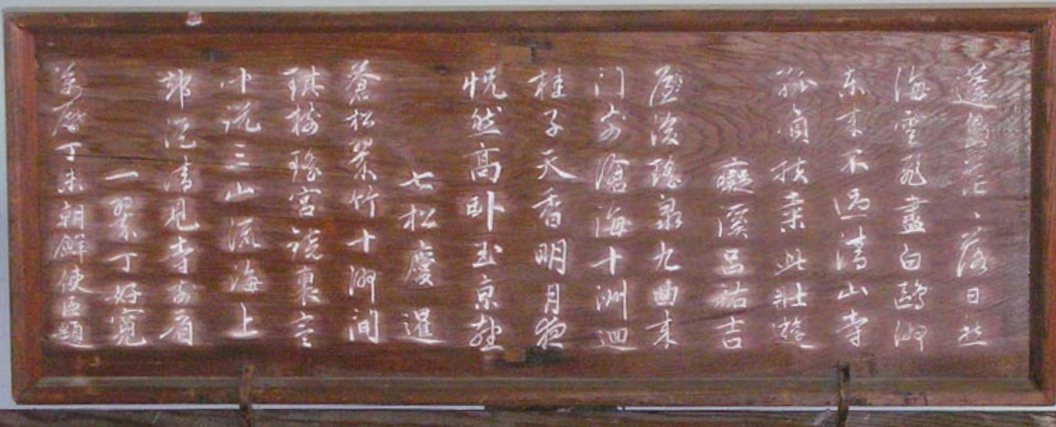


家康公の日朝国交回復

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝つねなり



〔慶長十二年通信使使詩稿懸板〕(清見寺所蔵、静岡県指定文化財)。駿府城で家康公と面談した朝鮮通信使の正使・呂祐吉、副使・慶暹、従事官・丁好寛の三使が清見寺の美しさを讃えた詩稿を扁額にしたもの。朝鮮通信使は10回、江戸で将軍と国書を交わした。このうち6回は、その往路・復路に清見寺を訪問・宿泊している。清見寺の美しさは朝鮮国に語り伝えられ、歴代の朝鮮通信使は、その訪問を楽しみにしていた。清見寺では、駿河の文化人との漢詩の「唱和」などの文化交流が行われた。

家康公は、文禄・慶長の役で滅茶苦茶になっていた日本と朝鮮中
国との関係修復に力を注ぎまし
た。將軍位についた翌年、慶長九年
(二六〇四)に朝鮮国から「探賊
使」として対馬に渡来した僧の惟
政を対馬の宗義智が京都に帯同
し、翌年に家康公と面談します。
そこで家康公は両国の国交の回復
を希望し、文禄・慶長の役の際に朝
鮮国から日本に連れてこられた捕
虜千三百人余を帰国させました。

日本に連行された朝鮮国の
人々の多くは農民でしたが、その
他にもいろいろな技術を持った人
達が居り、日本に新しい文化の波
を齎しています。

朱子学者の姜沆、鄭希得、洪浩
然らは、藤原惺窩などと交流して
日本に朱子学をもたらしめました。
陶工も大勢来しました。肥前有田焼

(伊万里焼)、長門萩焼、筑前高取
焼などは、各々の大名が連れてき
た陶工たちに作らせたものが基礎
になっています。縫官女の刺繍の技
術は、日本の服飾刺繍に大きな影
響をもたらしました。後に家康公
が進めた金属活字による印刷技術
も、このとき入ってきたものです。

家康公の行なった捕虜返還は大
きな反響をよび、朝鮮国はその二
年後の慶長十二年(一六〇七)に総
勢五百四人の大外交ミッションを
「回答兼刷還使」という名目で日
本に送ってきました。

一行は二月に釜山を出発し、対
馬、赤間(下関)、瀬戸内海を経由
して大坂に上陸し、陸路で京都を
経由し、江戸に到着したのは五月
でした。以降、朝鮮通信使の来日
は、このルートになります。

幕府は、明国との国交回復の仲

介を打診しますが、朝鮮国側はこ
れを拒否します。慶長元年(一五
九六)に明が秀吉を日本国王に任
命する使者を送ったのに対し、引
見した秀吉の非礼と、何ら外交的
回答をしなかった非礼が決定的要
因でした。日中間の直接の国交は
明治に至って再開されます。

朝鮮使節の一行は帰路、駿府城
で家康公と面談しました。家康公
は五隻の舟で駿河湾を遊覧して
歓迎しました。この一行に帯同し
て、さらに帰国を希望する千四百
十八人の捕虜が無事帰還しまし
た。前回とあわせて三千人弱の捕
虜が帰国したことになります。

この朝鮮使節が帰国して二年後
の慶長十四年(二六〇九)、日本と朝
鮮国の間に正式な国交回復の条約
が出来、釜山の豆毛浦に日本大使
館である倭館が設置されました。